

では、1995年度から2000年度は、博士課程の学生と研究生が急増しているが、その後大きく減少して、2017年度には研究生は2割以下にまでなっている。このような研究生減少の理由は不明であるが、本研究科の留学生数の減少は、全国的傾向と同じく、韓国、ヨーロッパ系、台湾の学生が減っていることによるものと考えられる⁽²⁾。さらに、他の傾向を見ると、学部生はゆるやかな増加傾向、博士課程の学生も、一旦減少していたものの少しずつ増加に転じ、修士課程の学生は増減を繰り返しつつ一定数を保ってきている。このような正規学生は、全学的な受け入れ強化の影響で急増している交換留学生の存在があるにもかかわらず、2017年度時点で7割を占めており、今後もこの構成比は続くと見られる。文部科学省による「高等教育機関における外国人留学生の受け入れ推進に関する有識者会議報告」では、戦略的な留学生受け入れには、留学生のキャリア形成につながる教育機会の提供が不可欠であるとし、大学院レベルの学位取得型の長期受け入れは、母国のリーダーとなる人材や世界水準の教育研究を担う人材の育成という目的にも沿っており、戦略の中心として考えることが望ましいとしている。したがって、将来の教育研究を支えることが期待される正規学生に照準を合わせて指導・支援を行っていくことは、時代の要請に沿ったものと言えるだろう。このような変化は、本研究科・学部の国際交流室日本語教室（以下、日本語教室）における指導・支援に、どのように影響するのだろうか。

韓国の学生から中国の学生に主たる割合が移行したことは、韓国語ほど日本語との共通性を持たない中国語の話者のほうが日本語習得に時間がかかるため、日本語指導の強化が必要になってきたことを意味する。また、研究生より正規学生、特に院生の割合が高くなったことは、これまでの大学院入学までの準備教育的な指導から、実際の学位論文あるいは学術論文の作成に直結する知識や、ゼミや学会で発表するスキル強化の指導に軸足を移す必要性があることを示している⁽³⁾。では、具体的にどのような指導・支援が必要なのだろうか。

まず、何より論文そのものの知識提供や作成能力強化が行なわれる必要があることは言うまでもないが、加えて、作成に至るまでの活動場面にも目を向ける必要がある。留学生は、例えば、日本人と同じように専門分野の講義やゼミを受講したり、研究室の先輩などに研究内容について助言をもらったり、日本人に日本語の校閲を依頼したりする。院生となれば、研究生よりはるかに、このようなアカデミックな活動場面は多くなる。その場面のひとつひとつが首尾よくこなせなければ、論文作成は達成できないため、そこで求められる知識提供や能力養成も考慮に入れる必要がある。

このような認識のもと、現状において、実際にどのような課題があるのかを明らかにするべく、2016年12月10日に本研究科・学部の教職員と留学生等関係者が一堂に会して座談会を行った⁽⁴⁾。そこで指摘された課題は、長い文章を書いた経験が不足しているという論文作成に関する課題に加え、研究室の独特な文化が理解しにくく、日本人学生や教員との関係構築が難しいこと、専門研究の前提として知っておくべき日本に関する教養的知識が不足していることなどであった。

この結果を受け、日本語教室では、重視すべき指導・支援は、1) 論文作成のための日本語

指導、2)日本人との対人関係構築力をつける指導・支援、3)専門のゼミや講義受講の前提となる日本に関する教養的知識の提供であると認識し、これまで行ってきていた1)はその促進・強化を、まだ行ってきていなかった2)と3)は、新たな講座の開発を行った。

以下では、2014年度から開始した論文作成のための大学院科目、2016年度から開始した対人関係構築のための講座・交流会、2017年度から開始した日本事情的知識のための講座について報告し、そこから導き出される課題を述べる。

2. 論文作成のための大学院科目

2014年度冬学期から大学院生対象の単位科目「日本語アカデミック・ライティング」(以下、JAW)が週に2クラス開講された。JAWの開設に先立ち、科目内容の説明会を行ったところ、39人の留学生の参加あるいは問合せがあり、そのうち28人は院生であった。このことは、院生がこのような科目を待ち望んでいたことを示している。

JAWは、論文作成の基礎的知識を応用可能な知識として着実に身につけることを目的とし、他部局の留学生の受講も可能とした。これまでに7セメスター(学期)実施し、受講者数は延べ85人となっている。その内訳は表1のとおりである⁽⁵⁾。

表1 「日本語アカデミック・ライティング」の受講者数の推移 ()は受講者中の単位取得者数

年度セメスター(学期)	2014冬	2015S	2015A	2016S	2016A	2017S	2017A	
受講者数	23 (11)	11 (6)	13 (6)	10 (9)	9 (6)	11 (9)	8 (-)	
内訳								
所属	本研究科・学部	23 (11)	10 (5)	11 (5)	6 (6)	6 (4)	5 (4)	5 (-)
	他部局	0	1 (1)	2 (1)	4 (3)	3 (1)	6 (5)	3 (-)
身分	博士	9 (5)	3 (1)	2 (1)	3 (3)	2 (2)	2 (1)	1 (-)
	修士	13 (6)	6 (5)	5 (5)	6 (6)	4 (3)	8 (7)	7 (-)
	その他	1 (0)	2 (0)	6 (0)	1 (0)	3 (1)	1 (1)	0
出身	中国	11 (7)	6 (5)	7 (5)	6 (5)	6 (5)	8 (7)	5 (-)
	台湾	1 (0)	0	1 (0)	0	1 (1)	2 (2)	1 (-)
	韓国	7 (4)	3 (1)	2 (0)	4 (4)	0	0	1 (-)
	その他	4 (0)	2 (0)	3 (1)	0	2 (0)	1 (0)	1 (-)

*身分別の「その他」には、研究生、学部生、交換留学生が含まれる。

JAWを開始した2014年度冬学期は、過去から受講を望んでいた学生が集まったため、人数が多かったが、その後は10人前後となっている。2016年度Aセメスターまでは、研究生や学部生、交換留学生でも、日本語教室が従来から開講している補講科目を多く受講した者や、院生と同等の日本語力がある者は、単位を付与せず受講可として受け入れていた。しかし、院生でない場合は、日本語力があっても、論文作成のごく基礎的な知識もない場合や、具体的な研究テーマを持たない場合が多く、授業の運営に支障をきたすため、院生および単位が必要な交換留学生の一部(母国で日本語の論文を書いた経験のある院生)のみに限定した。その結果、受

講者数は多少減ったものの、運営がスムーズになり、出席率も上がっている。

授業では、当初、論文の構成法や、論文らしい表現、引用方法、パラグラフ・ライティングなどの説明と練習を行った上で、自分の専門分野に関係するトピックを選んで3,000字程度のレポートを書くという、基礎的知識の強化を目標とする指導を行っていた。それは、論文や研究計画書等は書いたことがあっても、書き方については正式に学んだことがなく、見よう見まねで文章を作成してきた者が多いことから、これまでの知識を整理し、今後応用できる土台を作るという狙いがあった。しかし、多くの者は、目前の論文執筆があり、そこでの書き方を学びたいという要望を持っていて、学んだ知識を応用的に執筆へ繋げていかなければならない授業のやり方では、実質的な効果が生まれる前に論文執筆が終わってしまう。そこで、各自が自分の研究に必要な先行研究の論文の構成や表現の分析結果を発表するとともに、各自の執筆途中の原稿を皆で検討する方法、いわばOJTのような形態を採ることにした。その結果、各自の取り組みの真剣度が増し、分野を異にする人に、自分の研究内容や意義、原稿で述べようとしていることなどを、いかにわかりやすく説明するかを考えることで、各自が直面している課題を認識できるようになったと思われる。

しかし、それぞれが専門性の高い内容を発表すると、噛み砕いた説明でも限られた時間内では聞き手側は理解が難しく、形式的な事項や表層的な内容についてしか意見交換できないという問題があった。他分野の書き方の片鱗は学べるとしても、文体や表現の相違が大きい場合は参考になりにくく、効果的な学習ができないという問題が生じた。

また、院生の場合、欠席がちになるため、時間を要する長い文章の書き方の指導ができないという問題もある⁽⁶⁾。専門科目やゼミが優先されるため、JAWには、ゼミの発表、研究のための調査、研究室行事や学会への参加に支障がない範囲で出席することになる。毎回確実に出席できない状況では、前回のことを踏まえて考えるという授業はできず、1回完結の内容にせざるを得ない。そのため、長い文章、たとえば、10,000字以上の文章を書いて、全体を俯瞰しながら展開や構成を見たり、各所の表現の使い方をじっくり検討するという指導はできず、上述した座談会で必要性が指摘された、長い文章作成の経験を積むという課題を解決するには至らなかった。多くの研究で、文章の論理性や一貫性、構成に関する誤りのほうが、文法的な誤りがある場合より低く評価されることが報告されている（田中他1998、長谷川・堤2012など）ことから、文章レベルでの練習は優先されるべきことと考える。院生の状況を受け入れつつも高く評価される文章が書けるような練習ができる科目にしていく方策を考えねばならない。

以上のような現状から、JAWにおいては、受講者の分野の違い、長文練習のための時間不足の問題を、どのように解決していくのが今後の課題である。

3. 対人関係構築のための講座・交流会

日本語で学位を取得しようとする留学生は、基本的に日本人と同じ授業が受講できる能力が求められる。そのため、受け入れる日本人側は、日本語ができれば、日本人と同じ扱いができ

るとい認識があり、特に日本人と区別する意識はない。しかし、日本語力が高いと言っても特定の場面や分野の範囲に限られ、日本人の日本語力と比べれば格段に低い。加えて、上述の座談会で指摘されたように、研究室独特の文化や習慣がわからないとなれば、なおさら日本人と同じように扱うことは難しいと言える。馬越（1991）は、日本の大学は日本の社会以上に異文化であるとし、とりわけ大学院における教育や研究のあり方に問題があるとしている。例えば、「講座」（研究室）には言葉で説明しない掟のようなものがたくさんあり、情報が言葉で明確に表明伝達されないため、それが留学生には不透明に映り、誤解の原因になると述べている。また、三牧他（2005）は、理系研究室の事例調査から、研究室の見えにくい規範が院生の研究達成に密接に結びついていることを指摘している。このことは、文系研究室にも当てはまると言えるだろう。

そこで、日本語教室では、留学生が直面している研究室での悩みに関連する暗黙の規範を明示化し、今後、研究室内の人との関係づくりの際に役立てられるようにすることを目的として講座を実施することにした。この講座は、大学総合教育研究センターの栗田佳代子准教授の協力を得て、同センターの実施する「東京大学フューチャーファカルティプログラム（以下、東大FFP）」の修了生の企画・運営で実施する形態を取った。東大FFPとは、東京大学在籍の大学院生、ポストドクター、若手教職員を対象として、教育力・研究力を高めるためのプログラムである。東大FFPの修了生に運営をゆだねることにしたのは、年齢的にも留学生に近く、研究室に実際に関わっている当事者であることによって、留学生が本音を出しやすく、日本語教室では知りえない知識を提供できると考えたからである。また、できるだけ多くの人に関わってもらうことで、留学生の理解者を増やしたいという意図もあった。

講座のタイトルを「何気ない日本人の習慣・考え方を学ぼう！」とし、2017年3月27日に実施した。講座の企画・運営への参画を申し出た東大FFPの修了生は10人、募集して集まった受講者は21人であった。その内訳は表2のとおりである。

表2 集中講座「何気ない日本人の習慣・考え方を学ぼう！」の参加修了生および受講者の内訳

	所属	身分	出身
修了生	工1 総4 農1 薬1 新2	修士・博士10	中国2 韓国1 日本7
受講者	人13 教1 法1 工3 農2 学1	研究生10 修士7 博士2 研究員2	中国12 台湾2 韓国5 アメリカ1 ポーランド1

*所属：人＝人文社会系研究科・文学部、教＝教育学研究科・教育学部、法＝法学政治学研究科・法学部、
経＝経済学研究科・経済学部、総＝総合文化研究科・教養学部、工＝工学研究科・工学部、
農＝農学生命科学研究科・農学部、医＝医学研究科・医学部、薬＝薬学研究科・薬学部、
新＝新領域創成科学研究科、情＝情報理工系研究科、学＝情報学環・学際情報学府、公＝公共政策大学院

講座の企画については、修了生に全面的にまかせるのではなく、栗田准教授と松原悠特任研究員の指導と筆者の助言のもとに検討を重ねていった。2コマを使った講座の前半は、留学生がよく直面する場面を修了生がスキットで示して、場面状況から表現を考えさせたり、実際に悩んでいる事例を出し合ったりする活動を行い、後半ではそれらの事例について、修了生も入ったグループで解決法を考え、最後にその結果をポスターで発表した。講座のあとで行った

受講者向けアンケートで、講座について「大変よかった」を10、「全くよくなかった」を1として10段階評価をしてもらったところ、7以上が19人、2が1人、無回答1人であった。また講座に参加して解決できたこと、できなかったことを聞いた質問には、以下のような回答が寄せられた。

解決できたこと

- ・いろいろ悩んだことを留学生同士の意見と日本人の意見を聞いて安心になりました。(同回答他2人)
- ・留学生同士の悩みを聞いたこと。日本の方々のアドバイス・考え方を直接聞いたこと。(同回答他2人)
- ・母国の人でも、日本の人でも、自分と合う人と合わない人がかならずいて、自分ができる範囲で積極的に行動して、気が合う友達を作ること。あとは、もし上手いかなければ、断れば、「気にしない」選択肢が存在すること。(同回答他1人)
- ・自分のままでいい。自分を無理して日本の学校・研究室に入らせようということより、自分と同じ趣味を持っている人々と付き合ったほうが楽だと思います。
- ・人と付き合うとき、素直になること、積極的になることの大切さを分かりました。(同回答他1人)
- ・日本人が大学院に入った後あんまり友達を作りたくないことを分かりました。
- ・いろいろな価値観、性格の人と交流したこと。
- ・日本人があまり意識していない「酒の席」「上下関係、敬語」が特異な日本文化、かつ障害となっていることが理解できた。(同回答他1人)
- ・本音と建て前の話がよかった。
- ・協力すれば意外と答えがある。

解決できなかったこと

- ・結局「人それぞれ」という結論に至ったのかなと思うのですが、それはつまり自分が「どれほど自分のことを理解してくれようとする」人に出会えるかの問題に帰結する気がして、何だか解決したようで解決されてない感じがします。でも全体的に本当によかったです。
- ・日本人同士の空気を読むこと、本音を読み解くことは思ったより難しいと思いました。
- ・むずかしい人間関係の問題は相談できなかった。教えてくれなかった。
- ・文化の違いによる問題。特殊の例(日本の高校で英語を教えるとき、先生から差別された。その時の対応方法)
- ・(タイトルの)「日本人の習慣・考え方を学ぼう!」は全く達成されなかった。
- ・結局「日本人」と「留学生」の分け方(キョリのはかり方?)に問題があるのが明らかになった気がする。
- ・いつも留学生の立場から頑張ることに伴うなやみ。
- ・日本人の習慣・考え方を学ぼうより、理解することができました。

- ・もうすこし自由に? 「人間同志」として「日本人」「××人」とか分けず、語り合える場があればいいという気持ちが強くなった。
- ・東大全体に留学生及び diversity の大事さを発信していただきたいです。
- ・もうどうでもいい気持ちになった。日本人の付き合いのパターンを慣れないことを分かって相性が合わないと無理に仲よくする必要はない。皆の悩みを見ると、疑問を抱いているのは私だけでなく、皆も同じだから、きっと私一人の問題ではないと思う。相手も積極的にしなきゃ。日本人の心を閉ざすことを理解できない。とはいえ、これからも積極的に世界に触れるつもりです。ただ、相手も情熱にすることを望まなくなりました。日本人が大学院に入った後友達や人際関係を気にしないことを分かりました。最初から希望を抱いていないほうが楽です。
- ・日本人の挨拶をする心理的な回路。
- ・人間関係は個人の性格にかかっているの、今日習ったことを実生活に適用するのは無理だと思います。
- ・ある意味では当たり前の話だったような気がする。(人それぞれとか、積極的とか) 日本人の学生がもっと話してくれたらいいと思った。
- ・日常生活で日本人と誤解があったり、たがいに理解できない場合がある。誤解が解けたらいいが、互いに理解し合えない場合が多い。このような私たちが意識できてないことについて教えていただきたい。
- ・人それぞれなので、解決方法は一つではないのもしかたがありません。
- ・人間関係の件はやはり人によって違うと思います。正確な答えが得られないかも。

回答を見ると、他の人も同じ問題に直面していることを知って安心した、自分の思うまま表現すればよいといった意見に至り、自分なりの関わり方を見出した者がある一方で、人それぞれだから、解決できるわけではない、日本人に期待できなくなったといった意見を持つようになり、結局解決できなかったと感じた者も多かった。いずれの回答にせよ、他の人がどのように考えているかを知る機会となったことは明らかで、このような場のなかった状況から、少しでも手がかりが得られる場を提供できたことは有意義であったと言える。ただ、タイトルにある「学ぶ」から、今抱えている問題に対してすぐ解決できる回答が得られると思った受講者が少なくなかったため、期待とは違う講座であったという意見が見られた。知識を得ただけでは解決できず、さまざまな事例から自らが解決方法を主体的に見出す力をつけることこそが重要であることを受講者全員が認識できる形にならなかったことは問題であった。タイトルと内容の不一致を改善すること、講座の狙いを受講者にわかるように説明することが、今後の課題である。

この講座を通して、運営側の修了生もこれまで気付かなかったことに気付かされ、多くを学んだようである。とりわけ『なぜ留学生側だけが変わらなければならないのか』という問いかけが印象に残ったという感想が多かった。小さな気づきではあるが、ホスト側の人間として、

留学生対応のあり方を考える機会になったと思われる。また、運営側にも留学生が加わったことで、留学生側のニーズを企画段階で直接聞くことができ、共同作業のやりとりの中で、必然的に異文化に気づく機会となった。この講座の意義は、留学生だけでなく、日本人のためにもあると考える。

講座後、当日話し合われた内容、すなわち、皆の悩みとそれに対する回答が修了生によって「豊かな大学生活のための第一歩 Q & A」と題する資料にまとめられた。これは東大FFPのホームページに掲載されており、参加できなかった留学生に提供できるようになっている⁽⁷⁾。

講座での成果を継続させるため、引き続き栗田准教授と正木郁太郎特任研究員の協力を得て、各セメスターに2回ずつ、昼休みに交流会「フレンドシップ・ランチョン」を実施することにし、互いに悩みを打ち明けられる場を提供できるようにした。この会で「豊かな大学生活のための第一歩 Q & A」を配布して、その中から興味のある話題を選んで話したり、各自が日頃考えていることを話したりという方法で進めている。当初、はたして本音が出てくるものだろうか心配していたが、かなり踏み込んだ話が出され、多くがこのような場を求めていることを改めて認識することができた。

これまでの参加者数とその内訳は表3のとおりである。継続的な参加者は少なく、毎回の顔ぶれは変わっている。

表3 フレンドシップ・ランチョンの参加者数と内訳

回	月日	参加者数	内訳		
			所属	身分	出身
1	6/5	15	人9 法4 総1 農1	学部生4 研究生3 修士5 博士2 教職員等1	中国2 韓国3 ポーランド1 オーストラリア2 日本7
2	7/10	4	人1 法1 総1 薬1	学部生1 修士2 博士1	中国1 台湾1 日本2
3	10/16	12	人8 法1 経1 農1 情1	学部生4 研究生2 修士4 博士1 交換1	中国4 韓国2 インド1 日本5
4	12/11	18	人8 教1 法2 総1 工3 医1 情1 学1	学部生2 研究生3 修士3 博士5 教職員等5	中国3 台湾1 韓国2 ポーランド2 スペイン1 オーストラリア1 日本8

第2回は広報が十分でなかったこともあり、参加者が少なかったが、他の3回はある程度の数が集まった。第3回、第4回は、東大FFPでの呼びかけもあって修了生が多くなっている。また、第4回は、他部局の教職員の参加もあった。本郷キャンパスには、昼食交流会が行われているところが各所あるが、留学生が悩みを積極的に打ち明けられる場は少ないため、この会の現状を知りたいという意図による参加であった。

留学生が悩みを解決するには、学生支援サービスの利用という方法もある。しかし、それほど深刻でなかったり、深刻であっても、サービスの利用を躊躇することも少なくない。大西(2016)は、学生支援サービス利用の障壁として、「友達や家族に相談したほうが役に立つと思う」「同じ文化出身者の人のほうが、自分の問題をよく理解できる」「ことばの問題で、相談相手は私の問題を十分に理解できない」という意識があることを報告している。この意識は自分

と共通の背景をもつ人に相談したいということを示しており、「フレンドシップ・ランチオン」はそれになかった人が参加していることで、気軽に相談できる場となっていると思われる。年に一度の講座で、時間を取ってじっくりと研究室の文化・習慣を踏まえた対人関係のあり方を考え、年に4回の交流会に気軽に参加して日頃の悩みを解消するという取り組みは、学生支援サービスを利用する前の段階を埋める場として機能し、研究室におけるトラブルの防止に貢献するものとする。

しかし、講座も交流会も、運営する側の人材の確保や、場所の確保が難しいという課題がある。これらの取り組みの意義を理解してもらい、人材と場所が得られるよう、関係部局に働きかけることも今後の課題である。

4. 日本に関する教養的知識のための講座

多くの大学では学部生を対象とした「日本事情」と名付けられた科目が設置されており、研究生や院生も受講可能であるが、この科目は、多くの場合、基本的で網羅的な知識を扱っており、広く浅いものである。上述の座談会で必要とされたのは、専門教育の前提となる内容、いわば日本語教育と専門教育を結ぶような、専門の入門につながる教養的知識であった。

そこで、日本語教室では、まず試験的に、どの分野にも必要とされる日本史の知識獲得を目指して、講座を開講したいと考えた。しかし、新たな教員を雇用する余裕はないため、日本史学研究室の協力を得て、博士課程の学生である鈴木智行氏に指導を依頼することにした。院生の起用は、本人にとっても学びの場になるという意図もある。鈴木氏には、各セメスター8コマずつ、年間16コマの講座の担当を依頼することにし、加えて、日本史学の鈴木淳教授にも講演を1コマお願いすることにした。教授による講演を聞く機会を最後に配置することにより、留学生も自身の学習成果を確認できると考えたためである。

鈴木氏には、講座の趣旨や目的、留学生の特徴を伝え、指導内容を検討してもらった。留学生に日本人が学んだのと全く同じ内容を解説付きで提供することは、専門科目受講の前提知識になりやすく、日本での指導方法の特徴も知らせることができると考え、中学生向けの教科書に沿って指導を進めることにした⁽⁸⁾。表4が実施した内容である。

表4 特別講座「留学生のための日本史」実施内容

●2017年度Sセメスター「留学生のための日本史I」

回	実施日	内 容
1	5/16	日本列島の文化のはじまり（旧石器・縄文・弥生時代）
2	5/23	邪馬台国と古墳の出現（古墳時代）
3	5/30	聖徳太子と天武天皇（飛鳥時代）
4	6/6	奈良の都（奈良時代）
5	6/13	平安京の時代（平安時代）
6	6/20	武士政権の誕生（鎌倉時代）

7	6/27	東アジアの中の日本・モンゴル襲来（室町時代）
8	7/4	大航海時代の日本（戦国時代）

●2017年度Aセメスター「留学生のための日本史Ⅱ」

1	10/17	江戸幕府の成立と対外関係（幕藩制・鎖国）
2	10/24	江戸時代の社会（身分・百姓・町人）
3	10/31	倒幕と明治新政府（開国・戊辰戦争・文明開化）
4	11/7	明治国家の建設と対外戦争（議会・憲法・植民地）
5	11/14	外に帝国主義、内に立憲主義（普通選挙・社会運動・帝国主義）
6	11/21	昭和戦前期の政治と経済（昭和恐慌・日中戦争）
7	11/28	アジア太平洋戦争（統制経済・戦時下の国民生活）
8	12/5	戦後復興から高度成長期まで（占領・日米安保・55年体制）
9	12/12	〈講演〉近代日本の交通－人力車・自転車・電車

参加者数とその内訳は表5のとおりである。Sセメスターでは、ほとんどが本研究科・学部で、歴史系を専門とする留学生が多かったが、Aセメスターになると、本研究科・学部の学生の割合は減り、さまざまな部局から参加するようになってきた。両セメスター続けて参加したのは2人だけだった。Sセメスターを受講してやさしいと感じた者、入試や論文提出を控えている者が、Aセメスターは参加しなかったようである。

各セメスターの最後にはアンケートを行った。その結果の一部（授業内容の評価と難易度、特に興味を持った回）については表5に示す。

表5 特別講座「留学生のための日本史」参加者内訳とアンケート結果

		日本史Ⅰ	日本史Ⅱ
参加者数		22（うち5回以上参加12）	24（うち5回以上参加9）
内訳	所属	人16 法2 工1 学1 公2	人13 教2 法2 経1 総1 工2 農1 情1 学1
	身分	学部生1 研究生6 修士6 博士9	学部生1 研究生7 修士5 博士7 交換留学生4
	出身	中国10 韓国7 台湾2 イギリス1 アメリカ1 ポーランド1	中国14 台湾1 韓国7 マレーシア1 インド1
アンケート		回答者14	回答者9
		大変良かった5 よかった8	大変よかった7 よかった1
		少しやさしい2 少し難しい4	少しやさしい3 少し難しい2
		第5回、第8回に多く興味	第5回以降に多く興味

以下は、講座全般に対する感想の一部である。

- ・大航海時代について前から興味があり、授業で、その国際的で、かつ従来にない交流史をさらに確認できて、もっと具体的に知りたくなりました。
- ・日本の学者はどのように日本の近代史を語るのかずっと関心を持っております。今学期日本史の授業を通じて、多様な観点を聞きました。また、授業で鈴木（智行）先生が薦めてくださった加藤陽子先生の大作『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』という本を読みました。目から鱗が落ちるほどの論説と歴史事実がその本に出てきて、大変興味深いです。

- ・いつも外から日本や日本人を見て、外国人として日本という国について考えてきましたが、第5回目（日本史Ⅱ）の授業を取って初めて日本人の立場から日本史に対して考えてみました。実は同じ理由で第7回や第8回の授業もとても面白く新鮮でした。
- ・今の日本社会の成り立ちの多くが明治時代に始まったと感じました。
- ・アジア・太平洋戦争しか知らなかったけど、明治時代から様々な戦争が始まり、それがアジア太平洋戦争につながったと理解できました。

以上の結果から、これまで疑問に思っていたことが解決した、あるいは解決するための手がかりが得られた様子がうかがえ、おおむね好評であったと思われる。教員ではなく、院生が講座を担当することについては、1名を除き肯定的で、この形態については問題はなかったようである。また、最後の鈴木教授による講演は大変好評で、その回のみ参加者もいた。

講座の指導にあたった鈴木氏からの感想は以下のようなものであった。感想の一部を示す。

授業のやり方について

Sセメスターの時は事前に読んでくる教科書のページ数（参加学生への課題）に回ごとにばらつきがあり、また、必ずしも教科書に沿わない内容で授業することもあった（これは参加学生からの要望もあった）。そのため、後半になるとやや内容が詰め込みすぎとなってしまった。このようなやり方をとったのはある程度「テーマ史」を意識したためであったが、アンケートで全体の流れがわかりにくいとの指摘があった。Aセメスターはその点を改善し、教科書の指定範囲を均等にし、Sセメスター以上に教科書の内容に触れるようになった。そのため、やや通史的・政治史に偏りがちな授業となったが、このようなやり方でも必ずしも不満は出ていなかったように思われる。

Aセメスターでは、近代史を授業内容として扱ったため、参加学生の多くを占める中国・韓国の学生相手ではやりにくい部分もあり、ずいぶんと授業内容に気を使った。ただ、そのこともあってか、留学生が感じている歴史問題に関する考えを聞け（特に韓国の留学生から）、その点は授業をやってよかったと思う。

講座を担当して得られたこと

留学生向けに日本史の話をするにあたって、日本史に関する興味関心の幅が広がった。まず、自分の専門としない時代の講義を行うことで広がる面があった。また、日本史の授業を日本で受けていない、バックボーンが違う留学生からの質問は、無意識に前提としている知識の説明の難しさや、いままで関心が低かった文化史の重要性に気づかせてくれた。

同じ大学院生として、いままで日本史の留学生と個人的な付き合いはあり、その個人個人の抱える問題のようなものは分かったつもりでいた。しかし、今回日本史研究室以外の多くの留学生と付き合い合うことになり、日本語のレベルや日本文化への関心など、留学生の問題をずいぶん考えることとなった。今後様々な局面で留学生と接することがあるだろうが、その際には今回の経験を役立てたいと思う。

院生が指導を担当することの意義と課題

専門性の高くない入門的な内容であっても、かなり事前に準備の時間が必要になった。100

分近い授業をやるのが初めてであるということもあるだろうが、かなり大変であった。ただ、教員として就職した後に、間違いなくこのような困難には直面するわけで、院生の早い段階に8コマという短めの期間でそれに慣れておけるというのは、意味があることかもしれない。

この感想から、留学生が求めているのは、歴史といっても、政治史だけでなく、文化史も含めた、より深く日本理解につながるような、幅広い概論的知識であることがわかる。また、指導をした鈴木氏にとっても、この経験は有意義であったことがうかがえる。日常、留学生との接触が多くても、その理解は難しいと述べられており、このような形態の接触がなければ、気づきが生まれにくいことを示している。この気づきが日常に還元されて、よりよい関係へと発展することが期待される。

さらに、この講座を担当するにあたって鈴木氏には、講座の指導をより効果的に進められるよう、東大FFPを並行して受講することを勧めた。受講経験について鈴木氏は以下のような感想を述べている。

東大FFPに参加することの意義

教職などをとっていても、教える技術に特化した内容の授業はなかなかないので、かなり勉強になる。授業のスタイルを固める前に様々な授業手法を知っておくことは、授業準備を進めていくうえでかなり役に立つと思われる。

講座の担当と同時に参加した場合の意義と課題

授業と同時並行でとっていると、なかなかすぐには東大FFPでやったことを授業には反映できないと思う。ただ、様々な困難に直面しながら授業をしていることもあって、東大FFPの授業をとっている意義を感じやすい。同時に取っている場合は東大FFPで授業を受けるモチベーションを高める気がする。次回以降の授業で東大FFPの内容を反映できるようにしていきたい。

この感想から、東大FFPを並行して受講することは、担当する講座に対する工夫につながり、相互のモチベーションを上げるものとなっていたことがうかがえる。鈴木氏には、自らの研究も進めなければならない中、慣れない講座の担当、加えて東大FFPの受講と、非常に過酷な要求をしたが、今回の試みで、院生が自分の専門に近い内容の講座を担当することによって、視野を広げることができ、日本語教室の講座が実習の場にもなりうるという、これまでに例のない形態の取り組みの可能性も開かれたのではないかと考える。

おおむね留学生、院生双方にとって好評を得た試みであったが、課題もある。受講者には、歴史系が専門の学生もいたが、全く歴史の背景知識を持たない学生もおり、それらの多くは他部局の学生であった。今後、受講者のこのような既有知識の差をどのように扱うか、検討する必要がある。たとえば、本研究科・学部留学生のみに限定して、もう少し専門的な知識提供を行う形にする選択もありうるだろう。また、指導を担当した院生には身分が与えられない点も課題である。公的に認められた身分ならば、この経験をキャリアにすることもできるが、今回のようなやり方では、ボランティアにすぎない。今後この種の講座をさまざまな分野に広げていくとしたら、人材を得るために、この課題の解決は必須と言えるだろう。

5. おわりに

日本語教室で行なう3つの取り組みについて報告を行い、その課題について述べた。論文作成のための科目開設は、院生のニーズに沿ったものであったが、受講者の分野の違いや、長い文章の練習不足の問題があり、効果的な指導になっていないという課題があった。また、対人関係構築のための講座や交流会は、留学生の本学における研究生生活を安定させ、その結果として、論文作成を効果的かつ効率的に進めるための環境作りに貢献しうると考えられるものの、講座内容の再検討、人材や場所の確保という課題があった。そして、日本に関する教養的知識の講座も、留学生のニーズに沿ったものであり、講師となる院生にも有意義な体験の場を提供できたという効果が認められたが、留学生の既有知識の差への対応や、院生の身分付与の必要性が課題となった。これらの取り組みの効果や課題は、大学の国際化のあり方にも示唆を与えるものである。組織的な国際化に結びつけていくためには、本研究科・学部において教員間で共有できるようにするとともに、大西（2016）が指摘するように、大学運営に関わる、より高次のシステムに伝えていくことも必要であろう。

また、ここで紹介した3つの取り組みのうち、2つは日本語教室の外から協力を得て行ったものである。部局内では、日本史学研究室の協力を、部局外では、大学総合教育研究センターの協力を得て実施した。資源の少ない日本語教室にとって、外の助けが得られなければ、成果を収めることはできなかつたであろう。今後さらなる展開をしていくためには、このような連携は欠かせない。引き続き、学内のさまざまな部局に協力を仰ぎながら、取り組みを進めていきたい。

謝辞 日本語教室の講座を実施するにあたり、ご多用にもかかわらず、快くご協力くださいました鈴木淳教授、栗田佳代子准教授、松原悠特任研究員、正木郁太郎特任研究員、鈴木智行氏、東大 FFP 修了生の方々に、心より感謝申し上げます。

註

(1) 日本学生支援機構「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」による。

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/_icsFiles/afiedfile/2017/12/22/data17.pdf (2017年12月20日閲覧)

(2) 日本学生支援機構「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」(註1に提示)及び、文部科学省の平成12年度「留学生受け入れの概況」によると、全国の留学生の出身地で多いのは、平成12(2000)年度は、1位中国、2位韓国、3位台湾であったが、平成29(2017)年度には、1位中国、4位韓国、5位台湾となっている。また欧州からの留学生が占める割合も、平成12年度は3.5%、平成29年度は3.2%と、減少傾向にある。

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/_icsFiles/afiedfile/2015/10/19/data_12.pdf (2017年12月20日閲覧)

(3) 日本語教室では、1992年の開設以来、各学期10科目の補講科目を開講し、主として研究生の

準備教育を行なってきた。院生が受講することもあったが、日本語力が不足する場合で、あくまで中心は研究生であった。

- (4) 座談会の詳細は『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室・日本語教室記念誌』を見られたい。
- (5) JAW は週に2クラスあるが、受講者はいずれか一方にのみ登録することになっている。原則博士課程か修士課程かでクラス分けをしていたが、実際には指定された曜日時限に出席できない者が多く、混在する形になった。多少内容を変えていたが、基本的には大きな違いはない。表1は、2クラスの受講者を合計したものである。なお、2017年度Aセメスターは受講者が少なく、1クラスの開講となった。
- (6) 院生で単位が取得できなかった者は、すべてゼミ発表や調査出張などで欠席が多くなって、途中で受講を諦めた学生である。時間的余裕がないため、授業に参加できない問題は、科目登録の段階から影響し、受講の希望があっても、登録しない場合も少なくない。一方で、これまでの受講者のうち、2期受講した者が13人、3期受講した者が1人いた。忙しくても、時間が合えば、できるだけ参加したいと考える者が多いことを示している。
- (7) 「豊かな大学生活への第一歩 Q & A」
<http://www.utokyoofed.com/wp/wp-content/uploads/2017/04/alde3b5858c07f714581bdf032915601.pdf> (2017年12月20日閲覧)
- (8) 教科書として、2015年に出版された検定教科書『ともに学ぶ人間の歴史』安井俊夫他著、学び舎、を使用することにして、受講者には購入してもらった。この教科書は、内容が反日的との批判もあるが、現場の教員によって学習者の目線から作成されたもので、公平性もあり、留学生にとって適切と判断した。受講者からは、わかりやすいと大変好評で、受講しない学生からも購入希望があった。

参考文献

- 馬越徹 (1991) 「異文化接触と留学生教育」『異文化間教育』5、pp.21-34
- 大西晶子 (2016) 『キャンパスの国際化と留学生相談』東京大学出版会
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里 (1998) 「第二言語としての日本語における作文評価—『いい』作文の決定要因」『日本語教育』99、pp.60-71
- 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室 (2016) 『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室・日本語教室記念誌』
- 長谷川哲子・堤良一 (2012) 「意見文の分かりやすさを決めるのは何か? - 大学教員による作文評価を通じて」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号、pp. 7-18
- 三牧陽子・内藤 (都築) 裕美・林洋子・服部圭子・福良直子・藤澤好恵 (2005) 「『理工系研究室文化』における規範意識と情報伝達」『社会言語科学学会第16回大会発表論文集』、pp.232-235
- 文部科学省「高等教育機関における外国人留学生の受け入れ推進に関する有識者会議報告」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/08/21/1394116_002.pdf (2017年12月20日閲覧)